

発刊の辞

名古屋外国語大学は、この四月、外国語学部、現代国際学部の二つの既設学部に、新たに世界共生学部の新学部を加え、三学部体制によって新たなスタートを切ることになった。これを機に、従来、学部ごとに刊行されてきた『紀要』を一本化し、名称も『名古屋外国語大学論集』と一新することにした。ただし、図書館ウェブサイト上での公開と、「竹の庫:学術情報リポジトリ」としてデータベース化は従来通り推進していく。

「人文・社会学」の危機が広く叫ばれるなか、近年の世界の政治における混乱ぶりを背景に、むしろその重要さが認識されはじめている。とくに危険視すべき現象とは、「ポスト真実」時代と表されるようになった情報の意図的なくわんと濫用である。これは、人文・社会学的知がいかに脆弱であったかを示す一つの指標になりうる。しかし、この状況を克服することができなければ、人文・社会学それ自体の存在理由が問われることにもなりそうである。「ポスト真実」時代にあって、「ポスト真実」を克服し、「嘘」に抵抗しつづけるために、人文・社会学は、「真実」の担い手としての役割をより一層つよく自覚しなければならない。その実現のために求められるのは、第一に、読まれるため（リーダビリティ）の努力である。それ自体価値である学問というのは、存在しない。どれほど科学的に厳密な研究であろうと、どこかで時代との回路の意識を持たなければ、インクと紙の物質的な堆積物と化してしまう恐れがある。もっとも、リーダビリティの主張は、何もジャーナリズムへの接近を意味するわけではない。むしろ、ジャーナリズムとの距離をつねに厳密に量りつづけることこそが、真の人文社会学的知性の証となる。また、専門研究の教養知への還元は、人文・社会学の孤立を避けるために欠かすことのできないプロセスである。その意味で、『論集』での活動を、名古屋外国語大学出版会、ワールドリベラルアーツセンターでの活動と深くリンクさせていただいたら幸いである。

本学における外国語教育は、質、内容ともに全国的に見てかなりのレベルにある。この実力をぜひ研究面にも生かし、本論集を「外国学」(foreign studies)の中心的拠点の一つとすべく一人でも多くの先生からのご寄稿を期待したい。

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫